

会長挨拶

鳩貝 太郎



皆様こんにちは

関東は数日前から急に秋めいてまいりました。あの猛暑が懐かしく感じるこのごろです。本日は全国各地から全国学校飼育動物研究大会にご参加いただきありがとうございます。

また、本日は、文部科学省から初等中等教育局教育課程課課長補佐美濃亮様、日本獣医師会からは酒井健夫副会長様に来賓としてご臨席をいただき本研究大会を開催できますことを心から嬉しく思います。

さて、本研究会は平成16年7月に発足し、学校や幼稚園、保育園などでの動物飼育や動物介在教育が子供の成長に与える影響について考え、学校教育における動物飼育の重要性を明らかにする実践研究と意見交換を進めてまいりました。これまでに15回の全国研究大会を開催するとともに、日本獣医師会や教育委員会が主催する研修会、シンポジウムなどにも積極的に関わってまいりました。その結果、学校教育関係者、保護者、地域住民、そして地域獣医師会を交えた学校飼育動物支援ネットワークも進展してきたと自負しております。

しかし、一方では先日の佐世保での大変に痛ましい事件のようなことが起きてしまいました。長崎県では10年ほど前にも人命にかかわる痛ましい事件が起きたため、生命を大切にする教育が推進され

てきましたが、今回のような事件が起きたため長崎県はもとより全国各地の教育界には衝撃が走っております。

長崎県教育委員会は前回の事件後に児童生徒の命にかかわる意識などの実態調査を行いました。そのアンケートには「死んだ人が生き返ると思いますか」「死んだ動物が生き返ると思いますか」という質問がありました。皆さんはどのくらいの児童生徒が「生き返る」と答えたと思いますか。死んだ人が生き返ると答えた割合は15%でした。この割合は小・中学生の平均値ですがこの割合をどう考えたらよいのでしょうか。なお、中学2年生は小学生より高く19%でした。

私は、このように死んでも生き返ると思っている子どもたちがこんなに多くいるということに驚きました。この頃、本会の事務局長をされていた中川美穂子先生から「小学校で『死ぬ』の反対の言葉を聞いたら『生き返る』と応える子どもが沢山いて驚いた」という話を聞きました。子供たちは「命」というものを実感した体験がいかに乏しく、テレビなどの映像やバーチャルなゲームの世界からの情報に影響されていることが分かります。

私たちは学校での動物飼育、特に暖かい体温を持つ小動物の飼育活動とその活用をもっと充実させ、命の大切さ、命というものはかけがいのないものなのだということを実感を持って理解できるよう子どもたちを育てることが重要であると考えております。我が国では、学校で動物を飼育することを大正の時代から継続しております。飼育委員会や飼育係、生き物係という子どもたちの係活動はわが国だけのすばらしい教育活動なのです。

本研究会の研究実践活動、交流を一層推し進め、本日のテーマである「学校・園が楽しくなる動物飼育」を全国の各学

校で取り組んでいただけること、そして子どもたちが動物飼育を通して命の大切さを実感し、思いやりのある優しい人に成長することを心から願っております。

本日は、文部科学省で道徳教育の教科調査官をされていらっしゃる赤堀博行先生に「豊かな人間性の育成に資する動物飼育」と題してご講演をいただきます。学校における動物飼育の役割について示唆に富んだお話を伺えるものと期待しております。道徳教育が注目されている現在、赤堀先生は各種会議や会合に出席され、その合間には全国各地での講演会に出かけられるという超多忙な毎日をお過ごしですが、本研究会のために快くご講演をお引き受けいただきました。心より御礼申し上げます。

また、本日、口頭発表、パネル発表をしていただく皆様にはご無理をお願いしたところも多々ありますが、本日の発表のためにいろいろとご尽力いただきましたし

た。皆様のご協力に心より感謝申し上げます。

本研究会は、発足以来、宮下英雄会長、中川美穂子事務局長の指導力、実践力により発展してまいりましたが、昨年からは鳩貝が会長を引き継ぎ、吉本恒幸聖徳大学教授の研究室に事務局を移し、竹島昌俊獣医師が事務局長という体制で再スタートしました。まだ本研究会の新体制はよちよち歩きの状態ですが皆様のご支援をいただき頑張って成長できるようにしたいと思っております。これからも本研究会へのご理解、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

本日は発表者の皆さんと参加者の皆さんで交流を深め意義ある一日にさせていただきたいと思っております。では今日一日よろしくお願いいたします。

(国立教育政策研究所名誉所員／首都大学東京客員教授)